

大磯建物語⑤

旧安田善次郎邸



発行
大磯まちづくり会議

「銀行王」と呼ばれた 安田善次郎の生涯 ①



③

名 前: 安田 善次郎 (やすだ ぜんじろう)
幼 名: 岩次郎
出身地: 越中国(えっちゅうのくに・現富山県)
生没年: 1838.10 - 1921.9 (享年84)

幕末から明治・大正にかけて近代化の波が押し寄せた激動の時代に一代で「安田財閥」を築き、近代日本経済の発展に大きく寄与した人物がいます。その人物こそが、後に「銀行王」と呼ばれた安田善次郎です。

最盛期には国家予算の8分の1にも相当する富を築きますが、大富豪となっても質素倹約の生活を貫きました。一方、世間の評判は決して良いものではありませんでしたが、近年になってその功績は正当に評価されるようになり、善次郎の生き方や考え方は次の世代へと引き継がれています。

善次郎は、1838年(天保9)富山城近郊富山町鍋屋小路の平凡な農民安田善悦の三男として誕生。のちに父善悦は藩士の権利株を買い足軽身分となりますが、半農半士の暮らしでした。8歳から農作業を手伝い、寺子屋に通います。12歳頃から農作業のほか野菜や花の行商、夜は写本の内職で家計を助けます。写本で『太閤記』と出会い、豊臣秀吉のような天下人に出世したいと願うようになります。

「千両分限者」を目指し江戸へ

15歳の頃、大阪の両替商の手代が乗った駕籠を藩の勘定奉行が丁重に迎える姿を見て「金の力」を知ることになります。江戸に出て「千両分限者」(ぶんげんしゃ=金持ち)になると17歳から再三出奔を試みますが失敗。20歳の頃に両親を説得して日本橋の玩具問屋や鯉節屋兼両替商に奉公し、商いの知識や両替商のノウハウを身につけていきます。

「念願の独立」

1864年(元治1)コツコツと貯めた25両を元手に日本橋人形町通り(現在の中央区堀留町)に両替商兼乾物商「安田屋」を開業して念願の独立を果たします。1866年(慶応2)に日本橋小舟町へ移転し「安田商店」と改称して両替専業(銭両替商)となり、幕府の古金銀回収で巨利を得ます。この時すでに「千両分限者」になる夢を達成していました。

「太政官札」への投機

維新後、発足したばかりの明治新政府は財政難から「太政官札」(金札)を発行しますが、政府の信用力は低く、額面割れを恐れて市場は取り扱いに慎重でした。善次郎だけは「いずれ政府の権威も回復し、額面通りに通用する」と読み、金札を大量に引き受け取ります。市場の予想通り金札は下落して額面割れしますが、1869年(明治2)政府が額面以下での取引を

禁止した「正金金札等価通用布告」を発令したことで金札は正貨と等価になり、保有金札の差益で安田商店は更に莫大な富を手に入れます。また、政府に協力したことで政府からも高い信頼を得るようになります。

「銀行王」への道

1872年(明治5)両替商で最高の地位である本両替の許可を取得すると1876年(明治9)国立銀行条例の改正を受けて、安田商店の向かい側に第三国立銀行を設立し、「銀行王」への道へ踏み出していきます。

1880年(明治13)安田商店を合本安田銀行に改組し、諸官庁の両替や金銀取扱いの御用達となります。豊富な資金力で次々に事業を拡張し、とくに北海道・釧路の硫黄鉱山開発では釧路港を海外への特別輸出港に指定し釧路の地域産業を発展させ、ここでも莫大な利益を手に入れます。

1882年(明治15)には日本銀行の設立にも参画し、銀行家として高い評価と実績を積み、1887年(明治20)財閥の要となる私盟組織「保善社」(後の安田保善社)を設立します。

「銀行救済の神様」

1904年(明治27)莫大な不良債権を抱えて経営難に陥った「第百三十銀行」の再建を政府より委ねられ、不採算と判断し一旦は断りますが、日本銀行から特別貸付を受け救済に成功します。

銀行に対する不信・不安から批判もありましたが、日本経済の大動脈である銀行の安定が国家の安定につながると考え、生涯にわたり70余の銀行で経営再建に取り組み、「銀行救済の神様」と呼ばれるようになりました。

■安田善次郎・略年譜 (1838～1880年)

- 1838年(天保9)・越中国(現在の富山県)の農民安田善悦の三男として生まれる
- 1848年(嘉永1)・父善悦が武士の権利株を買い、富山藩の足軽身分となる
- 1853年(嘉永6) (ペリー来航)
- 1854年(嘉永7)・17歳から大商人を志し、再三江戸を目指し出奔するが失敗
- 1858年(安政5)・20歳の頃ようやく両親を説得し、江戸に出て日本橋の玩具問屋に奉公
- 1860年(万延1)・日本橋の両替商兼鯉節商・広田屋林之助商店に奉公
- 1863年(文久3)・文久銭投機に失敗し広田屋を退職、スルメ商兼両替商で凌ぐ
- 1864年(文久4)・日本橋人形町に両替商兼乾物商「安田屋」を開業、念願の独立を果たす
- 1866年(慶応2)・日本橋小舟町に店舗を購入、「安田商店」に改称して両替専業となる
・幕府の古金銀回収取扱方を務める(徳川慶喜が15代将軍就任)
- 1867年(慶応3) (徳川慶喜が大政奉還を発表)
- 1868年(明治1) (明治天皇即位礼、明治に改元)
・「安田商店」が太政官札引受に参加し相場回復で巨利を得る
- 1869年(明治2) (版籍奉還)
- 1871年(明治4) (廃藩置県)
- 1872年(明治5)・「安田商店」が本両替商に昇格、東京都心部の不動産投資を開始
- 1874年(明治7)・「安田商店」が政府公債保有を拡大し公金取扱いの為替方指定を獲得
- 1876年(明治9)・秩禄処分、「安田商店」が秩禄公債を大量買付け
・「第三国立銀行」を設立
- 1878年(明治11)・第一回東京府会議員選挙で、善次郎・大倉喜八郎らを選出
- 1879年(明治12)・善次郎の提唱により大阪に日本初の手形交換所開設
- 1880年(明治13)・「安田商店」から銀行業務を分離し、「合本安田銀行」を設立
・「共済五百名社」発足(安田生命保険の前身)

▶次ページに続く

「銀行王」と呼ばれた 安田善次郎の生涯 ②

第一次世界大戦後のバブル景気が終息し、株価暴落などで日本経済は慢性不況に陥り、銀行の信用は失墜、貧富の格差が広がるなど世相は殺伐とした様相を呈してきますが、莫大な資本力を擁する安田財閥は安泰でした。

■ 非業の死

1921年(大正10)神奈川県大磯の別邸・寿楽庵に滞在中の善次郎は、面会に訪れた青年に刺殺されてしまいます。自殺した犯人の朝日平吾は、不況をつくり私腹を肥やす資産家たちへの強い反感と怒りを抱いており、一代で莫大な富を築いた善次郎にその怒りの矛先を向けた犯行であったといわれています。

■ 生涯「勤儉貯蓄」「陰徳慈善」を貫く

生涯にわたり金融業を天職と考えていた善次郎は、顧客第一主義を掲げ顧客(預金者)の資産を守ることを第一とし、見込みのない事業への投資や必要以上の融資・寄付は行なわず、逆に見込みのある事業には惜しむことなく資金を提供し、数多くの企業の育成や成長を下支えしてきました。また、東京大学大講堂(通称:安田講堂)や日比谷公会堂(東京市政会館)などへ匿名を条件に寄付をしていたことがわかり、生涯「勤儉貯蓄」「陰徳慈善」の精神を守り抜いた人生でありました。



東京大学大講堂(通称:安田講堂)
竣工:1925年(大正14)



東京市政会館・日比谷公会堂
竣工:1929年(昭和4)



安田銀行本店
(現在の中央区日本橋小舟町)

■ 安田善次郎・略年譜 (1881~1921年)

- 1882年(明治15)・釧路硫黄鉱山経営に乗出す
・松方正義主導で日本銀行開業、三野村らと創立事務御用掛を務める
- 1887年(明治20)・安田家の資産管理する私盟組織「保善社」(後の安田保善社)発足
- 1888年(明治21)・「東京火災保険」(損保ジャパンの前身)の経営を承継
- 1889年(明治22) (大日本帝国憲法発布)
(東海道本線が全通 新橋~神戸間)
- 1894年(明治27)・矢野恒太を支配人に「共済五百名社」を「共済生命保険合資会社」へ改組
(日清戦争勃発)
- 1896年(明治29)・「東京建物株式会社」設立
・「第三国立銀行」を「第三銀行」へ改称
- 1899年(明治32)・経営破綻した「浪花紡績」を承継
- 1903年(明治36)・「日本製麻株式会社」設立
- 1904年(明治37) (日露戦争勃発)
・政府要請で第百三十銀行を経営再建
- 1905年(明治38) (ポーツマス条約調印)
- 1911年(明治44)・「株式会社安田銀行」設立
- 1912年(明治45)・「株式会社安田銀行」は「合名会社安田銀行」を合併の形式を以て継承
- 1912年(大正1) (明治天皇が崩御し大正天皇が即位)
・浅野総一郎が善次郎・渋沢栄一の支援で「東京湾沿岸部埋立事業」に着手
- 1914年(大正3) (第一次世界大戦)~1918年(大正7)
- 1920年(大正9)・後藤新平が東京市長就任、善次郎の支援で大規模都市開発「八億円計画」を立案
- 1921年(大正10)・大磯の別荘で右翼青年に刺殺される

● 千両分限者になるための「三つの誓い」

- 一、独力独行、決して他人を頼らぬこと、一所懸命働くこと。
- 二、嘘を言わぬこと。曲ったことをせぬこと。正直に世を渡ること。
- 三、生活費、小遣金などはすべて収入の八割以内とし、二割は非常の時のために貯蓄すること。また住宅には身代の1割以上の金を決して使わぬこと。

善次郎が「千両分限者になる」と志したときにたてた「三つの誓い」で、独立し成功を収めたあともこの誓いを守り続けています。第一は「勤勉」、第二は「正直」、第三は「貯蓄」の誓いで、のちに第一の誓いに「女遊びはしない」を加えています。有名なのが第三の誓いで、収入(手取給料)から2割を貯蓄へ回し、残りの8割で生活することを説いています。さらに土地購入等には、蓄財の1割以内とすることを定め、実際に日本橋小舟町の土地を購入する際には、1割以内になるまで蓄財してから購入したといわれています。

● 「東京湾沿岸部埋立事業」への支援



1912年(大正1)浅野総一郎の計画した「東京湾沿岸部埋立事業」に善次郎は渋沢栄一らと積極的に支援していますが、工事は難航し、1927年(昭和2)ようやく完了。埋立着工から14年を要しました。鶴見臨港鉄道(現在のJR鶴見線)には、安田善次郎の功績を讃え、名前に由来する駅名「安善駅」が今も残っています。同じく、浅野総一郎にちなんだ駅名「浅野駅」「扇町駅」もあります。

安田善次郎の処世訓(抜粋)

- ・勤なるとともに儉なれ、儉なるとともに勤なれ。
- ・勤儉貯蓄実行の骨髄は、自己の欲望を抑制し、己に克つことにある。
- ・日常の細事を大切に処理しないで、どうして物事が成功するだろうか。
- ・私にはなんら人に勝れた学問もない、才知もない、技能もないものではあるけれども、ただ克己堅忍の意志力を修養した一点に於ては、決して人に負けなれと信じている。
- ・何を志すにしろ、順序正しく進むことが一番である。これを無視すると、いわゆる豪傑肌になり、大言壮語をこととし、日常の些事をかえりみなくなる。
- ・これはよいと思った事は決してそのままにせず、必ず実行してみる。また、自分の慣習上、悪いと心づいた事は必ず禁断する。おそらくは人間の貧富貴賤の岐れ目はここであると思う。
- ・意思の弱き人は、その行為常に不文律にして、精神快活ならず、したがって自己の情欲を制して、勤儉貯蓄を成すの勇なし。
- ・意志の弱い人は、取り引きの間、始終人の後に立って、いわゆる「ひけ(おくれ)」を取るものである。このような人は情実にこたわって、常に損害を招く。
- ・一にも人物、二にも人物、その首脳となる人物如何。満腹の熱心さと誠実さを捧げ、その事実と共にたおれる覚悟でかかる人であれば十分。独立心と克己心の強弱が人の貧富の岐路となる。
- ・一旦奮然と志を決した以上は、如何なる困難障害に遭遇するも決してその志を翻さず、飽くまで不屈不撓の精神で勇往邁進すること、これ古来大事業を成就して偉名を成せる全ての人物の共通の特徴である。
- ・人生は一步一步順を追って前進す。世路は平々坦々たるものにあらざといえども、勇往邁進すれば、必ず成功の彼岸に達すべし。勤勉、努力、節儉、貯蓄、一日も怠るべからず。

旧安田善次郎邸 日本庭園

所在地： 神奈川県大磯町大磯496（北之端）
敷地面積： 715坪 ＊1894年(明治27)建物台帳記載



① 唐破風平唐門(からはふ ひらからもん)
門の屋根の側面の形状は、安田靱彦画伯が法隆寺聖霊院(しょうりょういん)にある聖徳太子像を祀る厨子の屋根(唐破風)を模して取り入れたもので、1931年(昭和6)に建造。



② 経蔵
意匠は安田靱彦画伯によるもので、奈良時代の正倉院の校倉造り(あぜくらづくり)を手本に1931年(昭和6)建造され、中には善次郎ゆかりの品々が納められています。(6坪)



旧安田善次郎邸は、JR大磯駅から徒歩10分ほどの王城山裾にあり、現在は安田不動産・大磯寮として管理されていて、通常は【非公開】で年に数回【特別公開】されています。

明治末期から大正初期の頃に浅野総一郎の別荘を譲り受けますが、1915年(大正4)に焼失、1917年(大正6)新たに別荘(寿楽庵)を建てます。善次郎亡き後、関東大震災で被災したため、現在の別荘は二代善次郎により1926年(大正15)に藤村銀次郎の施工で隣地に復元したものです。

広大な敷地には手入れされた美しい和風庭園が広がり、園内には亡き善次郎の冥福を祈るために建立された持仏堂や書物・仏像などが納められた経蔵の3棟の建物があります。また、1934年(昭和9)に国の重要美術品に認定された「嘉元三年(1305年)」銘の石造十三重塔をはじめとした多くの石碑や石像が美しい自然に囲まれて点在しています。



③ 石造感謝状
1902年(明治35)に設立した横浜電気鉄道会社は、当初の経営難から善次郎より支援を受けます。経営も軌道に乗った1913年(大正2)に石造りの感謝状が同社より献呈されました。



④ 石造十三重塔
もとは備前真金村の藤原成親卿の墓にあり、後に岡山市杉山家別邸に移され、1918年(大正7)安田家へ寄贈。石質は瀬戸内の花崗岩で、笠下の軸部には「五智如来」の梵字が薬研彫で刻まれています。



⑤ 寿楽園碑
1918年(大正7)最初の別荘「寿楽庵」ができたときに、裏山(王城山)の登山口にあったものを移設。
〔碑文〕
『御かまへはもうさず来たりたまえかし
日がな遊ぶも客のまにまに』

⑥ 持仏堂
もともとこの場所には「寿楽庵」の接客書院が建っていましたが、亡き善次郎の霊を祀るために遺族(二代目善次郎)が建立したお堂です。堂の反り上がった屋根は、善次郎がお迎えの鳥に抱かれ浄土に舞い上がる姿を模したものとわれています。(意匠：安田靱彦)

⑦ 石灯籠
元は奈良の神社の神灯として造立されたものと思われ、灯籠の中台六角の側面に走獅子と牡丹を交互に配したもので、南北朝時代屈指の出来栄えといわれています。



⑧ 夫妻の墓(五輪塔)
もとは王城山中腹に分葬されていた墓碑を持仏堂横に改葬。(意匠：安田靱彦)



⑨ 安田善次郎翁大石像
この石像はもともと東京横網町の安田本邸にあったもの。(作：彫刻家・北村四海)



⑩ 安田善悦大石像
善次郎の父・善悦翁が74歳ときの座像。(作：彫刻家・北村四海)



⑪ 安田善次郎翁大石像
救済の返礼として百三十銀行より寄贈。正面の題字は、徳川家達(いえさと)の麗筆。

旧安田善次郎邸

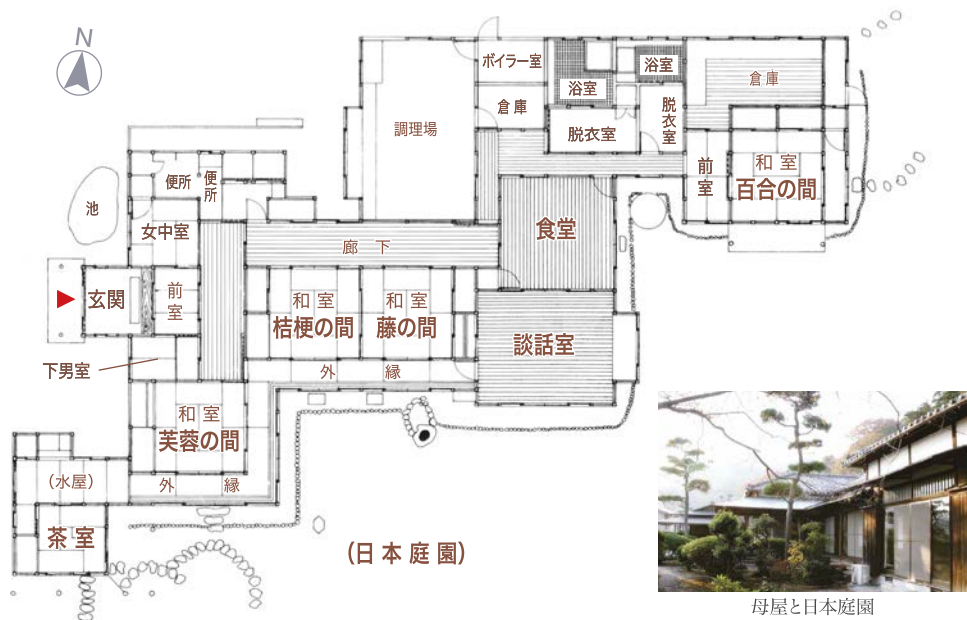
母屋(芙蓉の間・桔梗の間・藤の間・談話室)

旧安田善次郎邸の母屋は、純和風住宅の平屋建で、その外観は屋根を寄棟造棧瓦葺きに、外壁は下見板張(一部漆喰仕上げ)となっています。厨房と風呂場の内装は変更していますが、外観や間取りには大きな改築もなく、ほぼ当初の姿を残しています。

間取りは、和室を基本とした構成となっていて、主な部屋としては「桔梗の間」「藤の間」「芙蓉の間」「百合の間」の4部屋で、すべてが八畳間です。また、現在「談話室」や「食堂」としている部屋はフローリングの床で洋室となっています。もともと「談話室」は応接室としても使用されていたと思われ、出窓や壁付きの照明、網代天井など洒落た造りとなっています。

「談話室」からは外縁(畳敷き)によって二間続きの「藤の間」「桔梗の間」へとつながり、鍵の手に曲がりながら「芙蓉の間」「茶室」に続いています。

旧安田善次郎邸の現況平面図



所在地: 神奈川県大磯町大磯496 (北之端)
母 屋: 木造平屋建、寄棟・棧瓦葺、下見板張(一部漆喰)
延べ床面積: 102坪



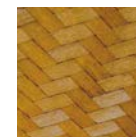
■ 玄関のたたきは、大磯砂利の洗い出し仕上げ。



■ 玄関の内観 前室に正座すると、来客と同じ高さの目線になります。



■ ソファが造り付けられた出窓は、当時のガラスを使ったモダンなデザイン。天井の一部には洒落た「網代天井」となっています。



② 網代天井(あじろてんじょう)
〔茶室・談話室〕
枋板(へぎいた)を主材とし、杉皮、桧皮、竹皮などを使って模様を編んだもので、その由来は川魚を捕るため網の代りに立てた漁法から名付けられた。



■ 藤の間(手前)・桔梗の間(奥)の二間続き



■ 桔梗の間(床の間)



■ 芙蓉の間からみた日本庭園



■ 芙蓉の間(床の間)

旧安田善次郎邸 茶室の外観・内観



■茶室の外観(南西側より)。屋根:入母屋柿葺、外壁:土壁。雨樋に竹を使用。

善次郎は、表千家11代宗匠碌々斎(ろくろくさい)に入門し、松翁(しょうおう)を名乗っていました。

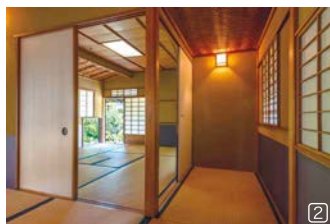


①

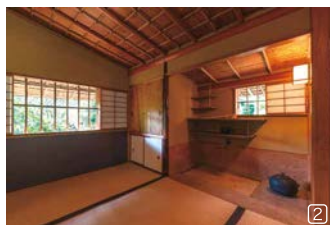
「茶室」は母屋の南西端に位置し、屋根は入母屋造柿葺(いりもやづくりけらぶき)、外壁は土壁仕上。一般的な四畳半の床の間付きで、躰口(にじりぐち)や茶道口(さどうぐち)のほか珍らしい貴人口(きにんぐち)が設けられています。天井は竹の棹縁天井(さおぶちてんじょう)や化粧柱屋根裏で、天井高も低くなっています。



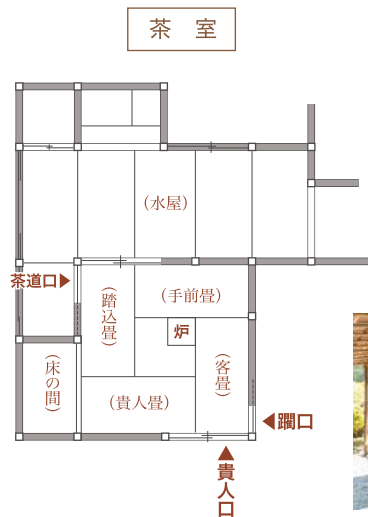
■床の間と掛軸(善次郎直筆「よつばらい」の絵)



■茶室の室内(水屋側より)。



■水屋。天井は竹の棹縁天井。



①



②

■左:貴人口(きにんぐち)
右:躰口(にじりぐち)

■参考文献

- ・大磯町教育委員会:『大磯のすまい』1992年
- ・「富の活動」(安田善次郎 述、菊池暁汀 編)
- ・新潮文庫:「銀行王 安田善次郎」陰徳を積む(著:北康利)2013年
- ・星海社新書:「現代語訳 意志の力」(著:安田善次郎、翻訳:守屋淳)2014年
- ・「歴史の町 大磯」(編・著:前山茂)2015年
- ・安田不動産(株)ホームページ|安田イズム

■写真提供 (順不同・敬称略)

- ① (公社)大磯町観光協会
- ② はまぎん財団(撮影:内山政彦)
- ③ 国立国会図書館「近代日本人の肖像」より
- ④ 国立国会図書館デジタルコレクションより
- ⑤ 安田不動産(株)ホームページより

■取材・編集協力 (順不同・敬称略)

- ・安田不動産(株)
- ・大磯町(都市計画課)
- ・大磯町郷土資料館
- ・(公社)大磯町観光協会

■編集後記

本誌(初版)を発行する2020年は、安田善次郎翁・100回忌の節目にあたるため、「旧安田善次郎邸」を取りあげることにしました。

善次郎翁は、生涯にわたり「勤儉貯蓄」「陰徳慈善」の精神を貫き、「お金」の重要性や「お金」の活きた使い方を説いて、ただ黙々と銀行がやるべき仕事を実践してきました。

生前、翁が語った処世訓は、現代を生きる私たちにも多くの課題を問いかけています。名言に「五十、六十鼻たれ小僧、男盛りは八、九十」とあります。何事も遅いということはありませんので今日からでも実践してみたいかがでしょうか。また、近年ではビジネス書として多数出版されていますので、ぜひこちらも一読してみてください。

最後に、この冊子を制作するにあたり多くの方のご協力をいただき心から感謝いたします。

■お問い合わせ

「旧安田善次郎邸」は【非公開】です。ただし【特別公開】を実施する場合があります。公開に関するお問い合わせは下記まで。

① (公社)大磯町観光協会・駅前観光案内所
〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯878-1
☎ 0463-61-3300
HP <http://www.oiso-kankou.or.jp>



大磯建物語⑤「旧安田善次郎邸」

2020年2月 初版発行 (発行部数:10,000部)

編集・発行 大磯まちづくり会議

〒259-0102 神奈川県中郡大磯町生沢969-3

(株)アスデザインアソシエイツ内

☎ 0463(73)2002

✉ oiso.machidukuri@gmail.com



大磯建物語⑤
旧安田善次郎邸



今日一日の事

- 一 今日一日三ツ(君父師)の御恩を
わすれず不足りふまじき事
 - 一 今日一日 決して腹を立つ
まじき事
 - 一 今日一日虚言をいはず無理
な願ことをすまじき事
 - 一 今日一日人のあしきをいはず
我がよきをいふまじき事
 - 一 今日一日の存命をよろこび
家業を大切にたとむべき事
- 右は今日一日の慎みにて候
翌日ありと油断をなさず
忠孝も
今日一日と
はげみつとめよ